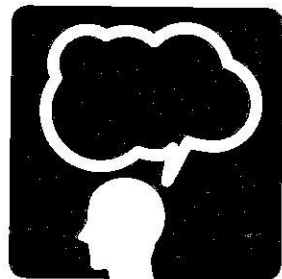


経営(継承)のツボ

理念



転期に立つ経営者の資質の鍛え方⁸⁴

はいちゅうのだえい

杯中蛇影

早川浩士

有限会社ハヤカワプランニング代表取締役

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に「早川浩士の常在学場」(筒井書房)、『介護人財創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ!経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

http://www.hayakawa-planning.com
 ブログ: http://ameblo.jp/hayakawa-planning/

オレンジプラン

2013年は、4人に1人が高齢者となり、その高齢者の5人に1人が介護サービスが必要とする時代となる。つまり、わが国の総人口の100人に5人、もしくはは20人に1人に対して、何かしらの介護サービスを用意しなければならぬということである。

12年6月18日、厚生労働省の認知症施策検討プロジェクトチームが、「今後の認知症施策の方向性について」を公表した。

続いて8月24日、「認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱ(日常生活に支障を来すような症状・行動や意志疎通の困難さが多少見られても、誰かが注意すれば自立できる状態)以上の高齢者数について」のなかで、15年には345万人、20年には410万人、25年には470万人になると将来推計が示され、認知症施策推進5カ年計画(13~17年度)、いわゆる「オレンジプラン」を9月6日に発表。

13~14年度に各市町村でケアパスの作成を推進、15年度以降、介護保険事業計画(市町村)に反映させるという。

団塊の世代があと10年で75歳を超え始め、大介護時代の到来は間もない。

用意とは、「地域で医療や介護見守りなどの日常生活支援サービスを包括的に受けられる在宅中心の認知症施策にシフトすることをめざす」ということであろう。

杯の中に蛇の影

2013年の干支は、蛇(巳)。疑いの心を持つて見ると、何でもないことでさえも疑わしく見え、怯え苦しむという意味を持つ「杯中蛇影」という故事がある。

ある人が友人の家で酒を飲み、壁にかけてある弓が杯の酒に写ったのを見て蛇と思ひ込み、その酒を飲んだことを気にして病気になるってしまうが、「それは蛇ではなく、弓の影が映っていただけだ」と友人から説明されると、たちまち病気が治ったという中国古典の『晋書・楽広伝』に由来する。

恐怖心や疑いの気持ちがあると、何でもないものまで恐ろしいものに見えていたものも、正体を知ると何でもなくなるということをしたとえた「幽霊の正体見たり枯れ尾花」「疑心暗鬼を生ず」「茄子を踏ん

で蛙と思う」等の類義語がある。

「痴呆」から「認知症」と呼称変更したことに合わせ、認知症の人と家族への応援者である認知症サポーターを全国で100万人養成し、認知症になっても安心して暮らせるまちをめざして05年度から始まった「認知症サポーター」を養成する活動は、12年9月に360万人を突破した。

「認知症を知り地域をつくる」とした取り組みは、一定の成果を上げたと評価ができる。

これに呼応して、介護職を志す者が増えるようにしたいところだが、それができていない。

人材難を克服するためにも、4つの視点と判断が急務である。

- ① 長期的視点(時代の先を視て判断する)
- ② 全体的視点(一部ではなく、全体を視て判断する)
- ③ 目的視点(本来の目的から視て判断する)
- ④ 多面的視点(全く違う角度から視て判断する)

対人力を高める意味からも「杯中蛇影」を払拭し、人材難の見方やとらえ方を見直すことが必要だ。